

執筆者は本学の教職員、在学生、卒業生、名誉教授とさまざまな立場の方々です。それぞれの方の興味や専門からの執筆がなされており、文章もそれぞれの個性があふれ、一般のガイドブックからは決して感じる事のできない独自の味わいを醸し出しています。まだご覧になっていない方は、是非ご一読下さり、ご活用下さい。

ご購入・お問合わせは次の通りです。

辟雍会（東京学芸大学全国同窓会） 東京学芸大学20周年記念館内
電話/FAX 042(321)8820 E-mail dousou@u-gakugei.ac.jp

ご案内： 東京学芸大学出版会ブックレット出版予告

東京学芸大学出版会では、現在4冊のブックレットの出版企画を進めております。今回、執筆をお願いしているメンバーの一人である大石 学先生よりご寄稿頂きましたので、概要をお知らせします。

『江戸の教育力』(仮題) 大石 学(人文科学講座)

テレビの時代劇などの江戸時代は、武士が威張り、刀をふりまわし庶民を虐げる未開の時代として描かれている。しかし、実際の江戸時代は、道に行き倒れがあると、役所に届け、身元を調べ、国元に知らせるなどの制度を持つ「文明社会」であった。そして、その社会を支える基礎には、鎖国体制のもとで日本を訪れた外国人たちが驚くような識字率の高さや教育への熱意があった。

本書は、近代日本の教育制度の重要な前提となる江戸時代の教育制度や実態について述べることを目的とする。これにより旧来の江戸時代像を一新するとともに、画一化と個性化、基礎学力とゆとり教育など、大きな揺れを見せる今日の教育制度の原点を確認することにした。

ご案内： 新刊予告 陣内 靖彦 著『東京 師範学校生活史研究』
本学出版会待望、本格的学術書、近日中に刊行予定！

東京学芸大学出版会から、本格的な学術書が刊行される運びとなりました。

著者の陣内靖彦先生(本学教育学講座)は『日本の教員社会 - 歴社会学の視野 - 』(東洋館出版社,1988年)などで、日本における教員の社会学的研究の代表的な研究者として周知されています。本書は、『東京都教育史・全五巻』の編集・執筆に携わった著者が、そこでの成果にその後の執筆論考を加えて完成させたものであり、教員養成の歴史にスポットがあてられています。

ある研究会で、「これからの10年は大学内外の複雑な動きを視野に収めながら短期的な課題にも迅速に対応せざるをえない時期だと考えます」といった意見を拝聴しましたが、教員養成の旗艦大学である本学にあってはドラスティックな制度変更の渦に巻き込まれている感を禁じ得ません。しかしそのような時であればこそ、温故知新の精神が必要ではないでしょうか。

本書は、師範学校設立の経緯から、その拡充、学生の生活実態などが活写されており、価値ある研究書となっています。そればかりか本学発足(第八章)の経緯などが詳述されており、本学関係者には必読の書と言えましょう。(腰越 滋)



出版会会費納入に関するお願い： 東京学芸大学出版会は、主に皆さまからの会費により運営されております。会員の方で、まだ年度会費を納入されていない方は、至急の納入を宜しくお願い申し上げます。また非会員の方におかれましては、ご加入をご検討頂けますと幸甚至極に存じます。なお納入先郵便振替口座は、以下の通りです。

口座名：東京学芸大学出版会、口座番号：00190 - 5 - 13873(寄付金納付の場合は赤枠用紙、会費納入の場合は青枠用紙をご使用下さい) です。

編集後記： 第4巻第2号(通巻第8号)をお届けします。諸般の事情により、16年度中に発行できなかったことをお詫び申し上げます。今号は、お二人の先生にご寄稿頂きましたが、ご多忙中にも拘わらず比較的早くに原稿をおよせくださったこと、心より感謝申し上げます。前号もそうでしたが、今号も辟雍会との連携を紙面上で謳っている関係上、全教員に配布させて頂くことにいたしました。お一人でも多くの方に、ご理解とご支援を賜れるようになることを、心より願います。(S)

東京学芸大学出版会<会報>プレスニュース 第4巻第2号(通巻第8号) 2005年5月31日発行

編集者：東京学芸大学出版会事務局 〒184-8501 東京都小金井市貫井北町4-1-1 東京学芸大学構内
 発行者：東京学芸大学出版会 [E-mail] upress@u-gakugei.ac.jp [Web-site] http://www.u-gakugei.ac.jp/~upress/
 [本号編集担当]：筒石賢昭(出版会編集長)・黒石陽子(事務局長)・腰越滋(Press News担当)

巻頭言： 良い本づくりへの願望 小川 潔(広域自然科学講座・環境科学分野)

私はかつて、自分自身のいくつかの論文やデ - タをまとめて単行本にすること、逆に長編の原稿の一部を取り出して小論にするのに苦労したことがある。前者は依頼されてから出版が実現するまでに長い年月がかかったので、その間待っていてくれた本屋さんにはただただ感謝なのだが、それに加えて、いざ原稿が完成してからも、出版までの道程は平坦ではなかった。まず本屋さんから原稿を突き返されたことである。読んでいて、さっぱりことばがわからないと言うのだ。自分では気をつけて書いたつもりでも、学術用語だけでなく専門分野の言い回しを無意識のうちに使っていて、専門の論文とか仲間うちでは通じることが、本屋さんには通じない。疑問を提示された箇所を書き直して渡したが、またクレームが返ってきた。そのあげく、本屋さんの指摘は「奥さんに読んでもらって通じるようになればよい」というものだった。私の連れ合いは私の研究分野に関して門外漢であることを本屋さんは知っていたからだ。

自分の言うことが相手に通じないのは、とてもいらいらすることだ。原稿をめぐる、連れ合いとぶつかる日々が続いた。「私はあなたの校正係じゃない!」とさんざん文句を言われた末に、やっと原稿の書き直しがすんだ。本屋さんがにっこりとした。あとで新聞の書評で、たいへんわかりやすく読みやすいとお褒めの言葉をいただいたが、じつはたいへんくすぐったいというか、恥ずかしい限りであった。本は読まれるべきものである。これは売れるかどうかという本屋さん側の事情ばかりでなく、書き手の側からも自分の主張を多くの読者に知ってもらう上で重要なことなのだ。

逆に長い原稿の一部を切り取って小論を書くのは、元ができていなのだから簡単だと必ずしも言えない。私の失敗例はここでも、自分がわかっているがゆえの情報伝達の不備であった。長い原稿、たとえば博士・修士論文とか単行本のようなまとまりを考えていただければよいのだが、そのなかの1章を独立した小論にするとき、ただ切り出してくればすむというものではない。もともと全体でひとつの意味をなして、順番に論旨の展開があるものを、途中の一部を取り出してしまうと、それ以前に述べたことを重複して説明する必要がある。用語の定義、方法論、理系の論文であれば研究対象(materials)などがしばしばこれに該当する。論文にする場合、たとえ先行研究として形式的に引用があっても、査読者によっては中身が理解できずに説明を求めることが起こる。分野が異なる雑誌への投稿では当然である。ここでも著者だけが前後の事情をわかっていて、小論の中では省略してしまい、他者に通じないことがある。

私の場合、小論の投稿で恥ずかしながら「論文の形をなしていない」という判定で却下されたことがある。書き直しに際し、元の原稿の先行する部分の一部を小論に付け加えることで、査読者から「とてもよくなりました」との評価を得て、雑誌に掲載された経緯がある。自分自身も雑誌の編集者や査読者をするようになって、立場こそ違え、こうした体験を何度もすることになった。

読み手の立場からも本づくりに思うことがある。世の中では個人が発表してきたいくつもの論考を、集めて1冊の単行本にすることがよくある。私はこういう本があまり好きではない。というのは、ひとつにはたとえば、有名な論客の主張が、オリジナルそのものの存在を無視され、晩年に出版された全集ものの発表された年代で引用され、流

(2 ページに続く)

学芸大 Press News

8号 (Vol. 4 No.2)

目次:

- 巻頭言： 良い本づくりへの願望(小川 潔) 1 ~ 2面
- 寄稿： 東京都薬用植物園のこと(東原 昌郎) 2 ~ 3面
- ご案内： 『武蔵野の自然と歴史 キャンパス周辺散策ガイド』 好評発売中!(黒石 陽子) 3 ~ 4面
- ご案内： 東京学芸大学出版会ブックレット出版予告 『(仮題)江戸の教育力』(大石 学) 4面
- ご案内： 『東京 師範学校生活史研究』 近刊予告 4面
- お願い： 出版会会費納入に関して ----- 4面

(1 ページから続く)

通するのはこっけいにすら見える。そこで扱われたテ・マは長年にわたって議論されていたのに、そのずっと後の時代に起こったような錯覚を読者に与えてしまう恐れがあるからだ。その意味では、通史を必ずつける編集上の配慮が求められる。関連してもうひとつは、ひとつひとつの論考は、書かれたそれぞれの時代背景を反映したものであり、読み手側の反論や納得を含めて初出時の意義があったはずである。時代を隔てた後に、書かれた論考だけを単純に1冊に集めてみても、著者の新しい主張や論点を発信するものではない。現代的意義を持たせるには、新たな意義のために、それぞれの論考の位置付けや相互の関連を示す部分とかが不可欠なのではないだろうか。

一方、複数の著者によってそれぞれに書かれたものを集めて1冊の本にする方式の出版も多い。ここでは編集者と著者との双方向の議論を経て、ひとつのテ・マとか論点をめざす統一された方向性が必要となる。しかし、昨今の本づくりにおいては、そうしたプロセスを経る余裕がなくなってきた。まさに寄せ集めの原稿を束ねて1冊の本にしてしまう傾向が強まっているような気がする。そして自分自身も、いなおうなくそうした流れに組み込まれていると感じている。

よい本づくりはコマ・シャルベ・スとは相容れないような状況が広がっている。はじめに紹介した私の本を出版してくれた本屋さんは、主人とパ・トさんとのふたりでやっている小さな会社で、「倒産する前に本を出してください」と口癖のように言っていた。失礼だが決して黒字には思えない。そのかわりこだわりをもった本を出している。手間暇をかけている。出版社や編集者が、本づくりにもう一度こだわることができるようにするためには、書き手にも読み手にも責任があると思う。

寄稿： 東京都薬用植物園のこと

束原昌郎（健康・スポーツ科学講座）

辟雍会設立記念事業として編まれた辟雍会製作ノ東京学芸大学出版会発行の「キャンパス周辺散策ガイド」は、その装丁の親しみやすさから、思わず手にとってページを繰りたくなります。表紙のデザインと色合いには落ち着きと暖か味があります。A5版というサイズに加えて、厚さ、重さ、そして透明の防水カバーにも携行に便利な気配りが感じられます。内容も「武蔵野の自然と歴史」の副題に相応しく、キャンパスを中心とした半径約6*_{0.5}の主な文化遺産がほぼ網羅され、どのページからも執筆者それぞれの熱い思い入れが伝わります。在学生、卒業修了生、現教職員、旧教職員のみならず地域の方々にも好評なもうなずける魅力的な仕上がりで、時間さえあればカメラとともにポイとデイバッグに放り込み片端から辿りたい衝動に駆られます。製作と出版に当たられた方々の心意気に感服せずにはおられません。

さて、私が特に近くにに住むわけでもなく頻繁に訪れるわけでもないのですが、この冊子に収録していただいてもよかったと思う場所があります。東京都薬用植物園です。

この植物園は、平成9年度博物館実習の連絡教官（今は連絡教員と言うべきなのでしょう）として訪問するまでその存在を知りませんでした。園長さんと実習生担当の学芸員の方にご挨拶を済ませ勧められるままに園内を一巡するうちに、私が長いこと探していたものに思いがけず出会いました。山岳地帯にも見られる野草や毒草の標本とその解説です。

野外活動を担当する私は、山岳地帯の野生動植物を目にする機会には恵まれています。

試みに思い起こすと、動物では、クマ、シカ、カモシカ、サル、ノウサギ、タヌキ、ヤマネ、ライチョウ、フクロウ、キジ、マムシ、アオダイショウ、サンショウウオ、イワナ、ヤマメ、ダニ、等々でしょうか。余談ですが、ダニには三度取り付かれ、頭部だけはどうしても除去できないまま私の肉と化しました。また、福島県南会津での登山中に、突然ドシンドシと地響きがして低木がザワザワと揺れ、とてつもなく大きな生き物の気配を感じたときは肝を冷やしました。幸い、相手もこちらが怖かったらしく一目散に逃げるところで、沢を飛び越すために高くジャンプした瞬間に見えた姿がまぎれもないツキノワグマでした。身の毛もよだつとはあのことでしょう。その年は2度見かけました。ダニとクマはもうたくさんです。

植物では、コマクサ、ウスユキソウ、イワカガミ、ツリフネソウ、ダイモンジソウ、オダマキ、ミズバショウ、チングルマ、レンゲツツジ、シモツケソウ、ヤマハハコ、トラノオ、コウリンカ、マルバダケブキ、クズ、カタクリ、リンドウ、ウツボグサ、トリカブト、ショウジョウバカマ、チャクナゲ、ヒメシャクナゲ、ワレモコウ、ザゼンソウ、ヤマユリ、フシグロセンソウ、ノビル、ハギ、マツムシソウ、ツリガネニンジン、モウセンゴケ、コケモモ、ウルシ、ギンリョウソウ、ノイチゴ、等々……時間をかければもう少し出てきそうです。

思い起こせる動物に比べて植物の数が圧倒的に多いのは、動物は南会津のクマのように人間を警戒して一瞬のうちに遠ざかるか姿をくらすことが多いのに引き換え、植物はこちらがその気にさえなれば心ゆくまで観察できるせいでしょう。植物に限って言えば実際にはこの数十倍数百倍も見かけているはずですが、情けないことに何度見かけても何年経っても姿と名前が一致しません。

私が識別できる野生動植物の数は都会に住む者として決して少なくはないと思いますが、私のような授業を担当する者としてはまだまだ足りません。

その理由の一つは、学生の質問に十分に答えられないことです。私の野外活動は学生と行動を共にします。経験だけは豊富なので野外の全てに精通している（本来はそうあるべきなのですが）と思い込まれ、実地踏査でも実習でも草花や樹木についてよく質問されます。けれども多くの場合答えられず植物学の基礎的な素養を欠く悲しさを痛感してきました。（時には体力まで抜群と誤解されて結構な重さを背負うことになり、これはもう加齢とともに本当に辛くなってきました。）

もう一つの理由は、有毒植物が最悪の事態を招きかねないことです。野外活動では、私はあまり乗り気ではないのですが、サバイバルトレーニングとか環境教育として野草を食べることがあります。これは責任者としては怖いプログラムです。スギヒラタケによる死亡事故が記憶に新しいところですが、毒草の御三家ともいうべきトリカブト、ハシリドコロ、バイケイソウの誤食事故も毎年のように報じられます。万一毒草を食べさせてしまったら…、しかも医療事情の心もとないこんな場所で…、と不安は募るばかりで、何とかこのプログラムを阻止できないものかとさえ思ってしまう。「毒草で中ったら薬草で治そうヨ！」などと開き直ったように口走ってウケてしまったこともあります。これは飽くまで冗談で内

(2 ページから続く)

心は本当に怯えています。ただし、環境教育実践施設の「野草を食べる会」は専門家の主催ですから安心です。タラノメの天婦羅は私にはここでしか食べられない贅沢品です。

こんな事情から、せめてよく見かける野草の名前と毒草の見分け方だけでも覚えようと若いころはよく図鑑を携行しましたが、私も素人にも分かりやすい写真の多い図鑑はとても重くて、装備の多い縦走、沢詰め、ロッククライミングなどの所謂スポーツ登山ではなかなか携行できず、携行できたとしても取り出して活用する時間的体力的余裕のないのが実情です。それに、せっかく図鑑を開いても多くは開花期の一瞬だけを切り取っているの、目の前の実物と簡単には重ならずべて特定できるわけではありません。

学生の質問に答えたい、毒草の見分け方を知りたい、だけどその余裕がない、そんなディレンマに陥っていた私にとって、博物館実習で同園を担当させていただいたことは幸運でした。

同園で配布する「東京都薬用植物園案内」によると、同園は昭和21年に設立され、薬事行政の一つとしての薬用植物の収集、栽培、基礎的試験研究、生薬取り締まりのための指導用生薬生産、生薬の品質検査を主な任務とし、同時に薬の正しい知識の普及のために標本や栽培植物を公開し、資料を展示し、薬草教室や薬草観察会を開催しています。

また、園内は、事務所も置かれる薬事資料館、冷房室を含む温室、標本区、栽培試験区、育苗区に分かれ、標本区はさらに、漢方薬原料植物区、水生植物区、有用樹木区、民間薬原料植物区、ケシ・アサ試験区、製薬原料植物区、有用植物区、染料・香料植物区、外国植物区、有毒植物区、ロックガーデン、林地に区画され、栽培標本は温室と標本区に展示されています。

私のお目当ては、門を入れてすぐ右手の薬事資料館、園内中央部北寄りのロックガーデン、その北東隣の有毒植物区です。

薬事資料館には、コバイケイソウとオオバギボウシの見分け方、トリカブトの若芽とニンソウの見分け方、ハシリドコロとタラノメの見分け方、酒肴に嬉しいギンナンや健康食品として知られたコンフリーとモロヘイヤに対する注意喚起（ギンナンの多食による子どもの死亡例があることをご存知でしたか？）、等の展示があります。ロックガーデンは3区に分かれ、ショウジョウバカマ、アキノキリンソウ、ヤマホトトギス、ノコンギク、ヤマラッキョウ、リンドウ、ヤマユリ、カワラナデシコ、ニッコウキスゲ、クガイソウ、オトギリソウ、キジムシロ、シシウド、オダマキ、ギョウジャニンニク、イカリソウ、ニンソウ、イチリンソウ、等々、山岳用植物図鑑の常連が目白押しです。有毒植物区は14区画に細分されて50種を超える標本が栽培展示され、その多くに解説が付されています。

ちなみに、ホームページ（<http://www.tokyo-eiken.go.jp/plant/yakuyo001.html>）の「薬用植物園『花便り』」や「山菜と間違いやすい有毒植物の見分け方」も、大変興味深く実用的です。

キャンパス周辺散策ガイドの口絵では表面に「全体マップ」が、裏面に「コース別マップ」があります。同園は、全体マップで言えば、北寄りを東西に走る青梅街道を小平神明宮を過ぎてさらに西進します。コース別マップで言えば、小平周辺サイクリングコース（Dコース）で 小平神明宮手前の美大通りを左折せず西に直進します。1.5*_{0.5}足らずで青梅街道は立川通りに出会い、正面に西武拝島線東大和市駅、道路を挟んで左手に同園のフェンスが見え、立川通りを左折してすぐ右側に広い門があります。キャンパスからの距離は約6*_{0.5}で、野川周辺サイクリングコース（Eコース）に比べて決して遠くありません。東大和市駅からは徒歩2分ほどです。JR立川駅北口からの西武バス南街方面行きでは「都立薬用植物園前」で下車するとすぐ目の前で、交通の便も良い所です。開園日は、都庁閉庁日（年末年始）を除く毎日（ただし、薬事資料館は土曜・日曜・祝日は閉館）で、開園時間は、4 9月が午前9時から午後4時30分まで、10 3月が午前9時から午後4時までです。住所、電話番号、は次の通りです。

〒187-0033 東京都小平市中島町21番1号 042-341-0344

ところどころの東屋にもステージ付きの野外集会場にもベンチが備えられ、障害者用トイレも完備しています。「キャンパス周辺散策ガイド」サイクリングDコースのアベンディクスとして、一度お訪ねください。

4月初旬、ロックガーデンでは「ヒトリシズカ」が名にし負わむとばかりに静御前を気取っていました。かと思えば、隣の有毒植物区では「フクジュソウ」が遅れた春を詫びてか控えめでしたが、その解説に曰く、「強心作用が強く、誤って食べると心臓停止により死亡する。」と。夢とうつつの見事なコントラストでした。

「キャンパス周辺散策ガイド」を皮切りに、出版会と辟雍会の連携が一層推進されることを期待します。

ご案内：『武蔵野の自然と歴史 キャンパス周辺散策ガイド』好評発売中！ 黒石陽子(本学出版会事務局長)

平成16年10月30日に辟雍会（東京学芸大学全国同窓会）制作、キャンパス周辺散策ガイド制作委員会企画・編集の『武蔵野の自然と歴史 キャンパス周辺散策ガイド』が東京学芸大学出版会の発行により刊行され、好評を博しております。本書は辟雍会の設立記念事業として企画・刊行されたものです。

構成はキャンパス周辺散策、玉川上水の自然、文学散歩、ウォーキング・ジョギング・サイクリングの4章です。第1章は東京学芸大学のキャンパス内から始まり、小金井公園、はげの道、国分寺周辺、小平周辺、野川周辺。さらに範囲を広げて少し離れた府中や調布、立川、三鷹、吉祥寺辺りの見所にも触れています。ページを繰ると、大学周辺にこんな所があったのかと驚かされることばかりです。新入生や留学生への大学案内や、親睦を深めるための散策にも大変役に立ちます。また在学生のご家族の方々にとっても、我が子の学ぶ大学やその周辺の様子を知っていただく上でよき手がかりになることでしょう。卒業生の方々にとっては懐かしさとともに新たな発見もいただけたと思います。